

DOCUMENT

series 160

Eye

混合交通を観察する

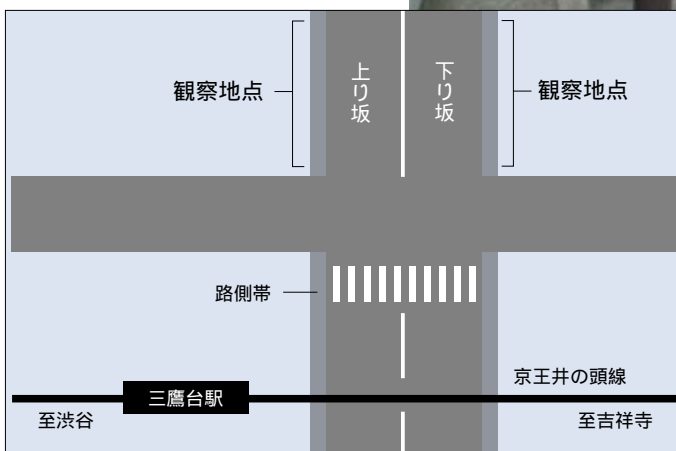
平成14年の人対車両の交通事故件数は8万4934件。その多くは道路を横断中の事故であるが、クルマが歩行者に接触して歩行者が転倒して死亡するというケースもある。このうち歩行者がクルマと対向する対面歩行中の事故件数は4518件(死亡・重傷事故704件、軽傷事故3814件)、歩行者がクルマに背を向ける背面歩行中の事故件数は7807件(死亡・重傷事故1125件、軽傷事故

ドライバーは歩行者保護の行動をとっているか?

WHY



観察場所 / 東京都三鷹市井の頭1丁目30付近
 観察日 / 7月14日(月曜日)
 天候 / 曇
 観察時間 / 16:30 ~ 17:30
 観察者 / 4名



6682件)であった。クルマが歩行者の側方を通過しようとするとき、ドライバーはどのような行動をとるか、東京郊外の駅前の路側帯のある道路で、歩行者とクルマの動きを観察してみた。

路側帯のある道路を同方向に進む歩行者とクルマを観察する

1時間に観察した340台中、歩行者の側方を徐行せずに通過したクルマ123台



WATCHING

歩行者はクルマの方が避けてくれると思っっている

観察場所は東京・三鷹市の三鷹台駅より南に伸びる通り。線路と交差する片側1車線の道路で、駅からは登り坂となる。観察中は帰宅途中の学生や会社員、買物の主婦に混じって高齢者の姿も見られた。この道路の両端には路側帯があり、歩行者が常にいる状態であった。歩行者は路側帯を歩いているが、対向してきた歩行者や自転車、電柱等を回避するために車道にはみ出すこともあった。

歩行者の側方を通過するクルマの動きは、歩行者と安全な間隔をとったクルマが126台(うち34台は歩行者の直前で回避)、徐行のみ行なったクルマが91台、徐行せずにそのまま通過したクルマが123台。対向車が来ないときには歩行者を避けるためか道路のセンターライン(追

歩行者の側方を通過する際のドライバーの行動

	登り坂	下り坂	小計
歩行者と安全な間隔をとった	79 (34.2%)	47 (43.1%)	126 (37.1%)
徐行のみ行なった	46 (19.9%)	45 (41.3%)	91 (26.8%)
そのまま通過した	106 (45.9%)	17 (15.6%)	123 (36.1%)
小計	231	109	340

観察者は約50m間隔を基準にして判断

越しのためにはみ出し通行禁止の黄線を大きくまたいで道路の中央を走行するクルマもいた。

多くのドライバーは歩行者を目視して確認し、通過していたが、歩行者とクルマのサイドミラーとの間隔が10cm程というケースも3例確認した。前方を歩く高齢の女性が車道にはみ出してしまったため、この女性が路側帯に入るまで、車両を完全に停車させて回避したケースが1例あった。

また、走行中に携帯電話を使用していたドライバーが10台以上観察されたほか、左ひじをひき掛けなどに置いて片手運転をしている男性ドライバーも目立った。歩行者に注意を促すためのクラクションを鳴らすドライバーはいなかった。

歩行者の多くはクルマが接近しても立ち止まったり、後方を振り向くことはなかった。

PROPOSE

歩行者の側方通過時は徐行して安全な間隔をとる

駅周辺や商店街などの人通りが多く、歩道と車道が分かれていない道路では、ドライバーは歩行者と接触しないように安全な間隔をとったり、徐行して歩行者の側方を通過しなければならぬ。だが、徐行することもなく通過する例が多く見られた。今回の観察でも、歩行者とクルマが同じ方向を進む場合、歩行者はほとんど後方を確認していないため、背後から来るクルマの動きはわからない。クルマと歩行者が接近してしまつた道路では、ドライバーは歩行者の行動を予測しながら歩行者の側方を通過してほしい。それには常に周囲の状況に気を配ること、歩行者保護の徹底が必要である。また、歩行者も近づいてくるクルマの動きには十分注意してほしい。

